

親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。

念仏は、まことに浄土にうまるるたねにてやはんべるらん、また、地獄におつべき業にてやはんべるらん。総じてもって存知せざるなり。たとい、法然上人にすかされまいらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずそうろう。

そのゆえは、自余の行もはげみて、仏になるべかりける身が、念仏をもうして、地獄にもおちてそうらわばこそ、すかされたてまつりて、という後悔もそうらわめ。

いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。

第4組 生振寺住職

白山 敏秀

text by Toshihide Shirayama

第二章「自然の出遇い」

関東の地で善鸞や日蓮の言動に疑心暗鬼のわが心を知らされた人々は命がけに聖人を訪ねその前に座る。聖人は厳粛に襟を正しわが名を名のる（親鸞におきては）。今の自分の中に興っているいのちの用き、その世界の広がり確かめるように。前に座る迷いの一人一人を優しく抱きとめるように。

名は呼び声であり、やがてそれは名のりとなる。親鸞という名は呼ばれて応えた出遇いの場なのである。

親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。

このあまりにもあっけない言葉の裏に、とてつもなく大きな、絶対の出遇いが感ぜられる。

出遇いとはどういうことであろうか。善導大師は娑婆（自我）に埋もれて迷う私のことを

自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫より已来、常に没し常に流転して、
出離の縁あることなし
(真宗聖典二一五頁)

と、疑いを自性とする罪惡生死の凡夫は何びともどんな関係も結び得ない、出遇えない者、ひいては救い無き者と押さえられる。しかし、その救い無き者

の中に呼び声が響いた驚きが、その呼び声に自我が破壊され止まぬ人生が親鸞という名なのであろう。

また、よき人とはその声を届ける人である。聖徳太子（観音）は孤児となりし聖人の親となり夢告に呼び、法然上人（勢至）は迷いを自覚した聖人の人師となり、教えとして呼び続ける。それは出遇い無き者に出遇いの門を開き続けんとする如来の不行にほかならない。

人は一生をかけて親（先祖）の精神世界に気付いていく（育っていく）ものである。そして、一人の短き生の中にいのちのスタートラインに立ち返ることを繰り返してきたのかもしれない。それは「生きるとは救いを求めること」というテーマであろうか。しかし残念ながらその救いに迷うのである。

法然上人の和語燈録の中に

世の人はみな因縁ありて道心をばおこす也。いはゆる父母・兄弟にわかれ、妻子・朋友にはなるゝ等也。しかるに源空は、させる因縁もなくして法然と道心をおこすがゆへに、師匠名をさづけて法然となづけ給ひし也。

されば出離の心ざしいたりてふかゝりしあひだ、もろもろの教法を信じて、もろもろの行業を修す
(真宗聖教会書四 六七九頁)

とある。自然とはとてつもない大きな力にはからわれて初めて如来との出遇いが開かれ仏道に立たしめられ、初めて聞かずにおれない教えが我が人生に姿を現す。法然の道心の因縁は父漆間時国の非業の死であったと記憶していたが、娑婆の仏縁の下には自然の用きとして如来との出遇いの自然を自分の上に領き見定めたからであろうか。

自然なる出遇いのまことは、疑いの心で念仏さえも利用し、地獄行きの我が身から何とか逃れんとする救われ難き自我を暴きだし、重ねて涅槃経の遇仏のアジャセをして

世尊、もし我審らかによく衆生のもろもろの悪心を破壊せば、我常に阿鼻地獄に在りて、無量劫の中にもろもろの衆生のために苦悩を受けしむとも、もって苦とせず。
(真宗聖典 二六五頁)

と語らせる。父王を殺した罪を自覚し、地獄行きの自分に恐れおののくアジャセは遇仏の縁により、かえって深く衆生の自我の闇へ嬉々として還相回向する仏道という人生に我が身を見出すのである。

多く語る必要などなかった。静かに念仏申し親鸞と名のるその人の前に、自力で求め生きる迷いなど一瞬に吹き飛んで、出遇いの共なる命を生きる御同朋御同行がただ領きおうているだけだった。